

鹿児島の昆虫42

沖永良部島のチョウ

昆虫担当 金井 賢一

本館は平成25年度財団法人科学技術振興機構（JST）の公募したサイエンスパートナーシッププログラム（SPP）に採用されました。現在、和泊町立城ヶ丘中学校および知名町立田皆中学校の生徒と共に、「身近な大発見～沖永良部島のチョウをとおして～」という題名のもとにイシガケチョウの調査を行っています。6月3日から5日まで、および7月15日から16日まで沖永良部島を訪れる機会がありましたので、その時観察した昆虫を紹介します。

イシガケチョウの中でも奄美大島以南に分布する亜種は、幼虫の斑紋に変異があると、30年以上も前に図鑑に記述されています。しかし、どのようなパターンがあり、成虫の斑紋とつながりがあるのかわからないのかを、いまだに調べた人はいません。



終令幼虫の斑紋変異

校庭に生えているガジュマルでも飼育することができるので、中学生が多くのデータを取ることができると考え、現在飼育観察を継続中です。この研究結果は11月17日（日）に、知名町立図書館にて開催する自然講演会で発表し、平成26年3月に発行する県立博物館研究報告書に掲載する予定です。ご期待ください。

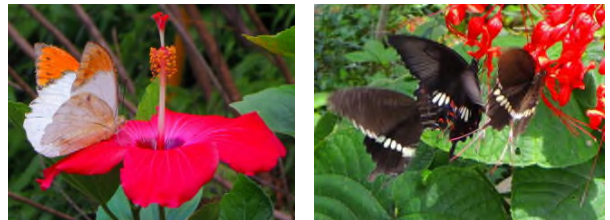
沖永良部島では現在までに67種類のチョウの記録があり、少なくとも40種類程度は土着していると思われます。6月と7月に訪れた際に、一番多く見たのはルリタテハでした。特に7月は林道を歩くと無数に飛び出し、大

きなお腹の雌も多数見られました。食草のサルトリイバラの仲間も多いので、多数発生しているのでしょう。



腐った果物に集まるルリタテハ

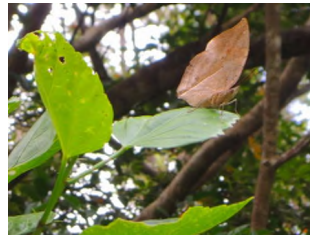
また7月にはツマベニチョウ、シロオビアゲハが多数ハイビスカスに集まり、南国の雰囲気醸し出していました。



(左) ツマベニチョウ (オス)

(右) シロオビアゲハ (メスに求愛するオス2頭)

林道の明るいところでは、人によって持ちこまれたと考えられるコノハチョウがなわばりを張るような行動を見せていました。



コノハチョウ

また2007年以来毎年県本土に飛来しているクロマダラソテツシジミは、6月上旬にはすでに終令幼虫が見られました。沖永良部島では2009年3月に幼虫・サナギが見つかっており、越冬したと報告がありましたが、毎年越冬できるのではないようです。今春の新芽がほとんど食べられずに伸びている状況から見て、今年は越冬できなかったか、あるいは越冬できてもごく少数だったとクロマダラソテツシジミ幼虫考えられます。（2013年6月5日撮影）

